

## 第3回京都府依存症等対策推進会議

日 時 令和3年1月21日（木）10:00～11:20

場 所 ルビノ京都堀川 加茂の間

出席者 <委員>

山下座長、松田部会長、坂田委員、本郷委員、上田委員、伊勢戸委員（リモート）、榎原委員、中島委員、横地委員（馬場代理） 計9名

（欠席：滝口委員、三木委員、佐藤委員、守谷委員）

<事務局他>

鎌部障害者支援課長、山口参事、庄田課長補佐、熊取谷主査、野中主事

中村精神保健福祉総合センター所長、他関係機関担当者

### 【内 容】

1 開会（あいさつ：鎌部障害者支援課長）

2 議事

（1）パブリックコメントの結果について

資料1に基づき事務局より説明

（2）京都府依存症等対策推進計画（仮称）最終案について

資料2に基づき事務局より説明

（3）今年度の取組状況及び来年度の事業計画について

資料3に基づき事務局より説明

3 閉会（あいさつ：鎌部障害者支援課長）

### 議 事

（1）パブリックコメントの結果について

特に意見なし

（2）京都府依存症等対策推進計画（仮称）最終案について

#### 委員からの意見等

（松田委員）P16 に薬物依存の記載部分があるが、どちらかといえば行政の視点から書かれている。回復支援の立場からすると、当事者がやっているNAなどの自助グループが一生懸命取組をされている。回復施設として、京都マックや京都ダルク、木津川ダルクも活動されているが、民間団体のことには触れずに「再乱用防止教育」の記載だけだとかなりバランスが悪いのではないかと思う。

（榎原委員）どうしても薬物依存では、病気というよりも再犯防止のために病気を治しましょうという視点で施策ができていくような印象が強くなる。あくまでも健康被害という部分で薬物依存をとらえていかないと、偏見、孤立、差別ばかりが浮き彫りになっていく。パブリッ

クコメントでだされていた京都ダルクの反対運動もその地域の中で困ったことが起きるからというよりはなんか怖い、なんか嫌だ、きっと何かが起こるはずといった想定で住民の方は反対される。その辺が今後は、そうではない、病気としての健康被害として私たち市民も薬物依存をとらえていきましょうという視点があると全体の依存症に対する偏見、差別というもの少しずつ緩和されていくと感じている。生死に関わる健康被害としての病気なんだという視点があればよいと思う。

※資料 2-4 の計画の副題について、委員からは、計画の記載内容に沿った副題である「案の 1」と、当該計画を府民に自分ごととして考えてもらうためのメッセージが端的に伝えられている「案の 2」に意見が割れ、最終的に松田部会長から、両案を組み合わせた「依存症は身近な病です。予防から回復まで支えあえる地域に」の案が提案され、了承されました。

- (3) 今年度の取組状況及び来年度の事業計画について  
特に意見なし